

- 図版七
- (1) " 副室上面
 - (2) " " 内部
 - (3) 七つ塚石棺上面
 - (4) " " 内部
 - (5) 七つ塚土師器碗
 - (6) " 須恵器壺
 - (7) " " 釭

図版八 関戸院寺址出土の軒瓦拓影

図版九 関戸院寺址出土の軒平瓦・軒丸瓦

図版十 関戸院寺址出土の鸕尾

長福寺裏山古墳群

鎌 木 義 昌
 問 壁 忠 彦
 問 壁 霞 子

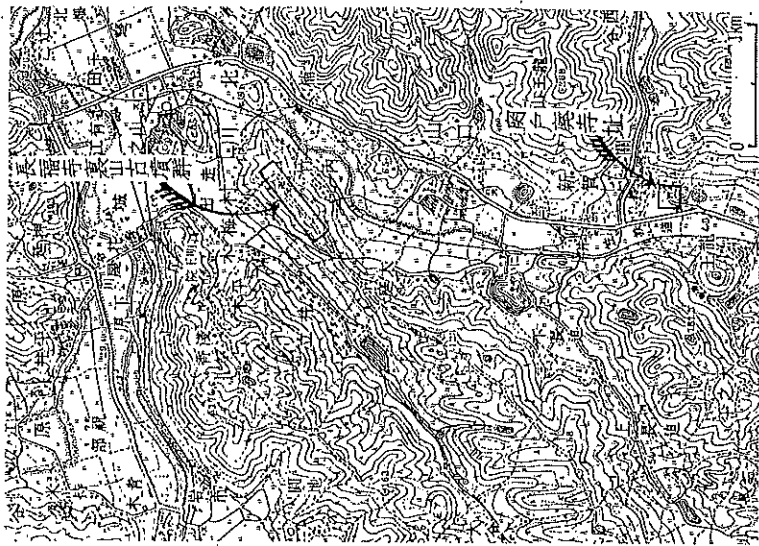
一、位置と調査

(図版一の(1)、第1、2図)

遺跡は岡山県笠岡市山口と走田の境界線上に位置している。古くは新山村山口と北川村走田の境界線上にあたり、第1図西南隅から東北方にのびる丘陵状地形の末端部となっている。この丘陵末端部は、90m前後の標高を有し、西南への屋根つづきの部分を除き、低地は田畑の地帯となっ

ている。屋根の東北端に位置する東塚から西南方にかけて、今回の調査対象となった仙人家、一つ塚、双つ塚、七つ塚がその順序にかなり近接してつくられている。附近には、その他、破壊された古墳などが若干認められるけれども、調査の対象とはしなかった。この古墳群中、もともと大きい前方後円墳である双つ塚は、笠岡市だけでなく備中西部最大の前方後円墳である。

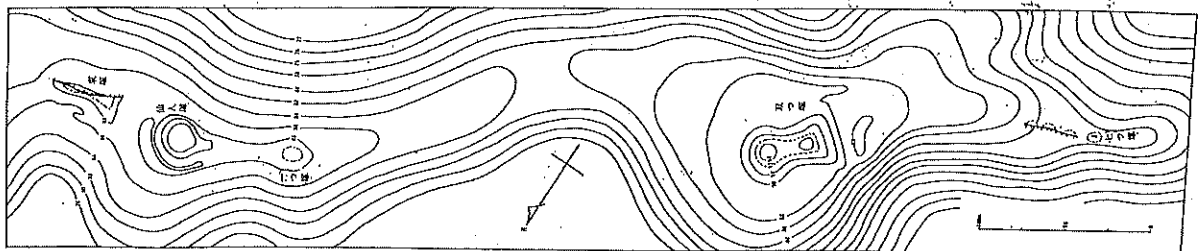
調査は昭和三十六年二月一日より二三日まで、二三日間にわたって行なわれたが、対象となった古墳は、七つ塚を除いて他は全部既掘のものである。今回の調査も主な目的



第1図 通勝附近の地形

は、比較的調査されることのすくなかつた備中西部の古墳を、考古学資料として記録にのこすことであり、古墳の外形測量、残存石室の実測などを主とし、埴輪配列の状況調査などに必要な最小限の発掘を一部分行なっている。

調査全期間を通じて、真家では、前方部にわずかに残存する石室を清掃し、副葬品の配列状況を記録するとともに、埴輪配列の有無の検討を行なった。仙人塚では、墓石の有無、埴輪配列の検討などを主目的としたが、後円部の石室の上、墳頂部にもう一つの堅



第2図 古墳の配置

穴式石室が破壊されたまま、基部のみを残存している事実、あるいは後部部から前方部にかけて、局部的な配列を示す埴輪配列などを把握している。一つ塚では残存する箱式棺の残骸らしきものを認め、又つ塚では、後部主体施設の確認と埴輪配列の検討を目的とした。七つ塚は未発掘と推定される箱式棺を主体とするもので、この種のものとして

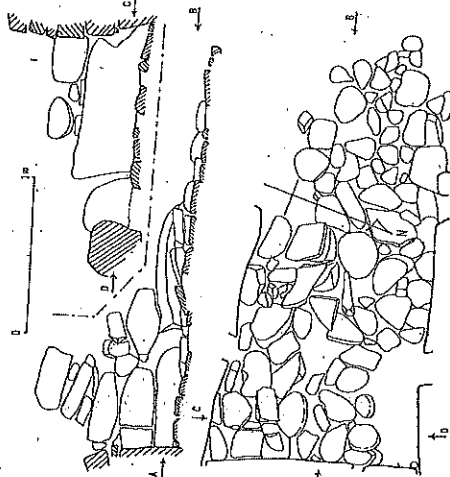
は珍しい副室をともなう事実を知ることが来た。なお本発掘は、笠岡市が主催したものであり、鎌木義昌が調査を担当し、間壁忠彦、間壁置子が補助担当者となった。また、地元協力者以外に黒田光、西岡憲一郎、高橋護などの諸氏の協力を得ており、その方々には心から感謝の意を表したい。

二 個々の古墳

(1) 東塚 (図版一の(9)~(13)の(1) 第3~13図)

(墳丘) 細長い扇根上に連なる古墳のうち、東北端に位置する東塚は、前方部を西約15度南に向けた前方後円墳である。墳丘の南半は開墾でくずされ、特に後部部はその週

っている。墳頂部が盗掘などで、若干低くなっているとしても、長さ比較べ高さの低い式の墳丘をなしていたと思われる。前方部前面から後部部北側にかけて、埴輪に細く浅い空濠が残っている。この古墳群では、仙人塚や又つ塚にも、この種の空濠がめぐるので、今消失している南側にもめぐっていたことが想像される。墳丘を築いた土は、この丘を構成した花崗岩の赤茶けた風化土と後期弥生式土器片を含む有機土からなっている(第4図)。附近に弥生時代後

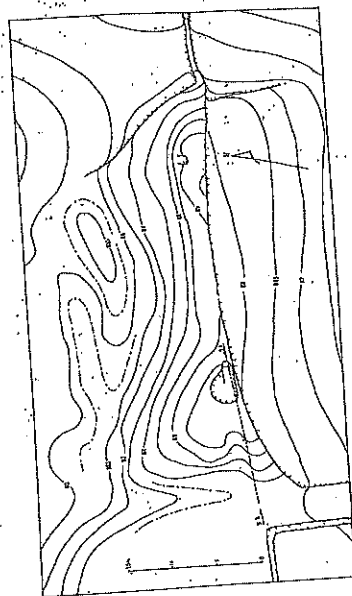


第5図 東塚前方部埋穴式石室

期の包含遺跡があつて、その土が古墳構築に利用されたことが知られる。空濠から墳丘にかかるとともに、葦石かと思われる自然石と埴輪片が散見される。

(前方部主体) 後部部主体は過半を失った墳丘と共に消滅したと思われる。前方部には盗掘溝がかろう

じて残存し、これを清掃すると長軸に平行した石室が基部の中はきとめていた。大小さまざまな角ばった自然石で積んだ石室は内のみ巾1.3、1.1m、残存部内長2.7m、床面には不定形の平石を敷いている(第5図)。石室構築時の掘込みの状態から、これが横穴式石室ではなく、竪穴式石室であ



第3図 東塚の地形

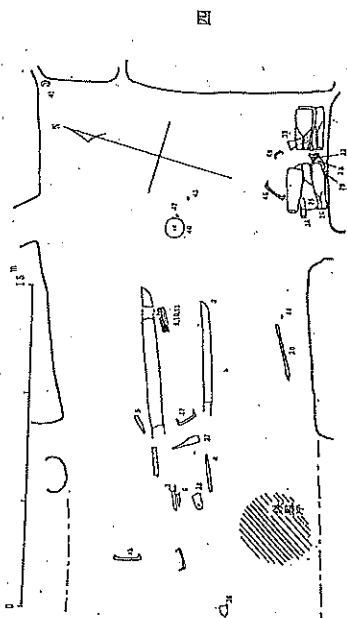


第4図 東塚前方部断面

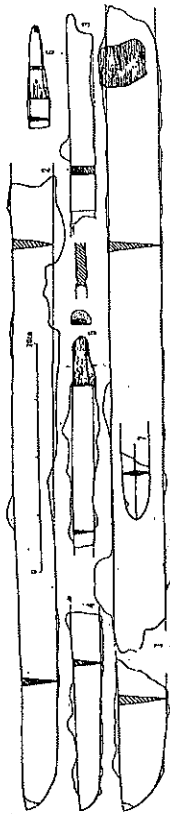
半を失っているが、北半は松林となりかなり墳形を保存している。

この部分から墳丘を推定復元すると、長50m弱、後部部径、前方部巾共に約25mとなる。墳丘基部で、前方部が後部部よりも2m近く高くなっているのは元来の地形によるものであろう。そのため後部部頂と前方部頂はほぼ同じ比高でありながら、後部部高約3.5m、前方部高2m弱とな

三

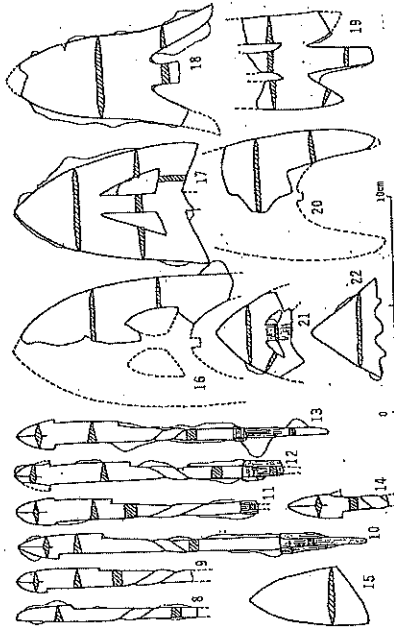


第6図 東塚石室内埋物の配列



第7図 東塚・刀・劍・刀子

つたことと石室長も3皿まではなかつたことが認められるのである(第4図)。
 奈掘溝は石室石積の西半を取りのぞくまでに達していたが、床面には原位置



第8図 東塚・鉄剣

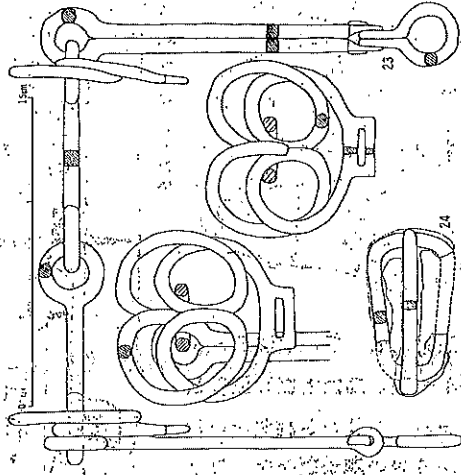
の遺物も残存し、擾乱された土中にも鉄片などを呑んでいた。第6図に示した如く、石室中央に、先を東、刃方を南にむけた刀をはじめ、鉄斧、刀子、砥石、鉄鏃を配し、その東に鏡と白玉、東南角から南壁ぞいに農工具、厩具をおく。室の東南角、西端に近いあたりなどには、木棺に打ちこまれていたと思われる鏃があつて、石室中央部の遺物が棺内、南壁ぞいの遺物が棺外におさめられていたことを想定させる。

(前方部石室内の遺物) 刀・劍(第7図) 石室中央部で発見された刀は断片が多く、厚形をたもつものはない。身中の広いものから細身の刀まであつて、3が1の筈であるとしても五本以上が副葬されていたことになる。7は劍先と考えられるもので、遊離鉄片中にあつた。

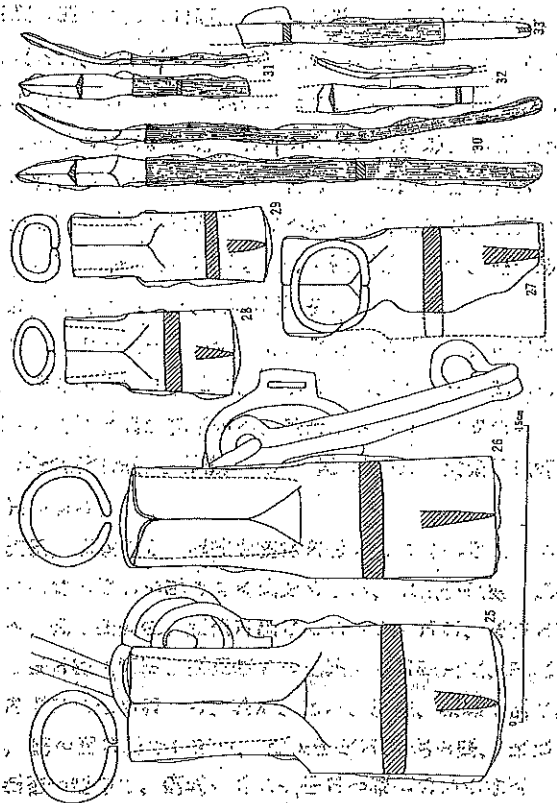
鉄鏃(第8図)には細根形と広根形があり、細根形の一部が刀の近くで原位置らしく発見されたほか、大部分は遊離鉄片の中から検出された。細根の鏃は長い棒状部にねじりが認められる。鋒部の形には片刃、三角形、片刃の先端が三角形となるなどの変化があり、片刃の先が三角形になる式には、三角形の基部を片側にだけ張り出すものと両側に張り出すものの二種がある。細根の鏃は断片が多く、総

数は五〇本を越すものと思われる。鋒部の形で分類できる数は、三角形二、片刃一五、片刃の片側に張り出す三角形一二、両側にはりだす三角形四である。広根の鏃は八種一〇本あり、16と21が各二本のほか、他はそれぞれに大きさ、形、透しの状態などを異にし、中には実用性を失つた様な大形扁平なものもある。

厩具(第9図) 石室の東南角で鉄斧に附着して発見された槽は、一般的な二連式の御に二本条線の引手と棒鉄を



第9図 東塚・厩具



第10図 東塚・工具

まげた形の鏡板を連結した形をなす。二本条線づくりの引手は一端を環状に作つて銜と連結し、他端に別づくりの引手をつける。棒状の鉄からなる鏡板は、面製の草葉にとりつける中央の方孔から両側に相対した6の字をえがく様に棒鉄を一回半まげた形をなす。相対する6の字形の棒鉄を結びつける様に、引手の内側で銜の鐵に連結する。このほかにも紋具一個が有難鉄片中にあり、馬具の一部をなしていたと思われる。

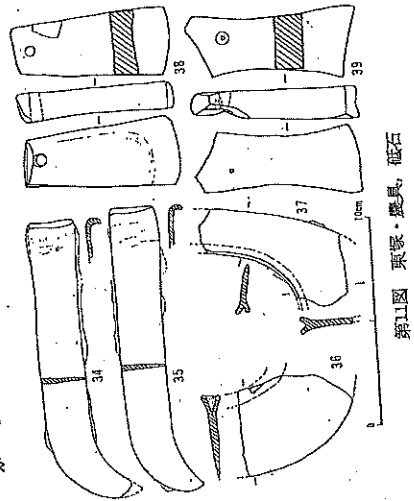
工具(第10図) 鉄斧は五種合計一〇個。長さ19cmに近い大形品は肩部の形で二種に分れる。肩の張りの強いもの二個と張りの弱いもの二個とである。小形品は長さ8.5cm(例)と10cm(例)の二種各一個あり、長い方が巾はせまい。以上四種は石室東南角にかたまつて発見された。長さ13cmの中形品(例)一個は石室中央部西よりであった。

鉈は完形の一個(例)が石室南壁そいに原位置で発見されたほかは、遊離鉄片中にあつた刃部二柄部一である。例は全長26.5cm、木柄の痕跡ある部分は尾部端まで続き20cm、刃部は上反り、刃部断面は底のやや凹んだ三角形をなす。これよりもやや薄いつくりの刃部二個と、尾部先端に木質のつかない部分を残す柄部一がある。

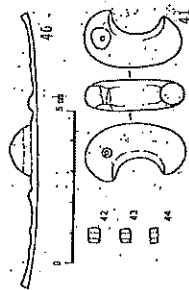
器具(第11図) 長さ14cm、先端を内灣させ基部を直角に折りまげた薄いつくりの鎌三は石室南壁そいと遊離鉄片中にあつた。木柄を刃と直角につけた痕跡をとどめる。鉄先断面二個は遊離鉄片中にあり、それぞれ別個体と考えられる。共に内縁に溝をつくつて木身をはめる式である。

磁石(第11図) 一端に小孔ある短冊形の小磁石二個は、石室中央西より(例)と石室東南角(例)にあつた。いずれも各面とも使用痕がいちじるしい。

鏡(第12図) 径約9cm、外向きの鏡面と波文をめぐらした中に五個の乳をおく、退化した五獣鏡形式の薄い鏡で、石室中央東よりにあつた。鏡面にはわずかに布目の附着が見られる。



第11図 東塚・馬具・磁石

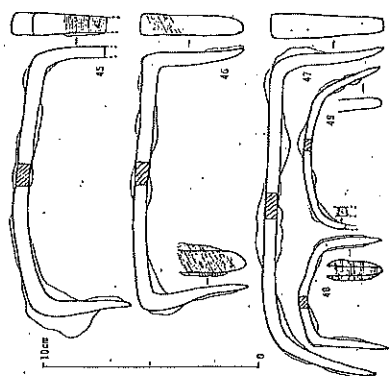


第12図 東塚・鏡・玉

玉(第12図) 両端の尖つたため、製玉一個は石室北東角にあつたが、原位置かどうかあきらかでない。滑石の白玉四個のほとんどは鏡の附近にあつて径約5mm、厚さ2mm~3mmである。

鏡(第13図) 方形断面をもつて、コ字状をした鏡は合計八個。内大

形品は12~14cmの長さをもち、木に打ち込まれた痕跡を示す木目は横又は斜めに残っている。これらが木棺に使用さ



第13図 東塚・鏡

れたことはまぎれなく、組合せ式の木棺が納められていたと想像される。小形品二個は石室東南角で農工馬具と共に発見

されたので、木棺に使用されたものか、運物を納めた木箱があつて、これに使用されたものかのいずれかであろう。

石室出土の遺物、墳形などから、東塚の年代は五世紀末葉のうちに比定できるであろう。

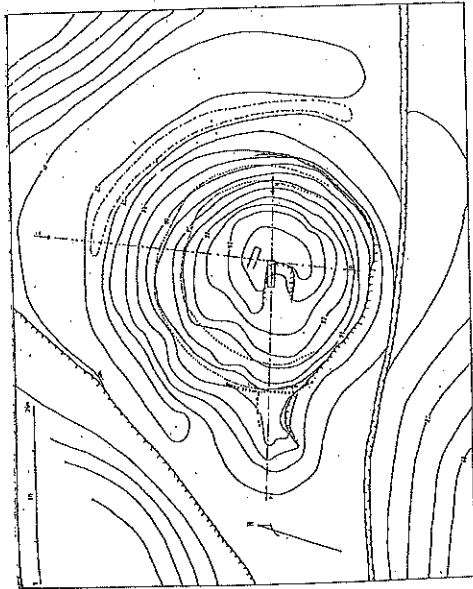
(2) 仙人塚 (図版三の(9)~同五・第14~19図)

(墳形及び外部施設) 東塚から尾根続きの西方に存在する仙人塚は、長径43m・短径36m・高さ5mの帆立貝式古墳である。巾約2m・深さ0.5mの空蔵が後円部のみにめぐっている。東塚の前部から、仙人塚後部まで、僅かに20mで、その間は、人工的とも思われる程平坦である。方形部は尾根そいに西側に連られ、西15度強南に向く。方形部の中は約12m・高さ1.5m。現状では後円部頂が、径約8m平坦になっており、段築は明かでない。主石室は西側より盜掘されて露呈し、墳丘の南側は一部削られている。

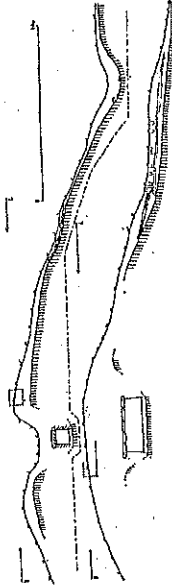
滑石は径15~20cmのやや角張つた自然石を利用して、全面に敷くのではなく、墳丘斜面のほぼ中位に巾1~3mにわたつて鉢巻状にめぐらしたものであるが、南側は削られている為不明。

埴輪は方形部に面した後円部の前面と、方形部の北側に

一列円筒埴輪の基部が立って発見された。後円部の埴輪は、方形部に面する4皿が直線に立てられ、その両側は埴形にそって立てられている。しかし、北で10本、南では6本が確認されただけである。なお南側の方形部つけ根あたりで、三本だけ円筒が二重に立てられていた。南側は埴



第14図 仙人家の埴形



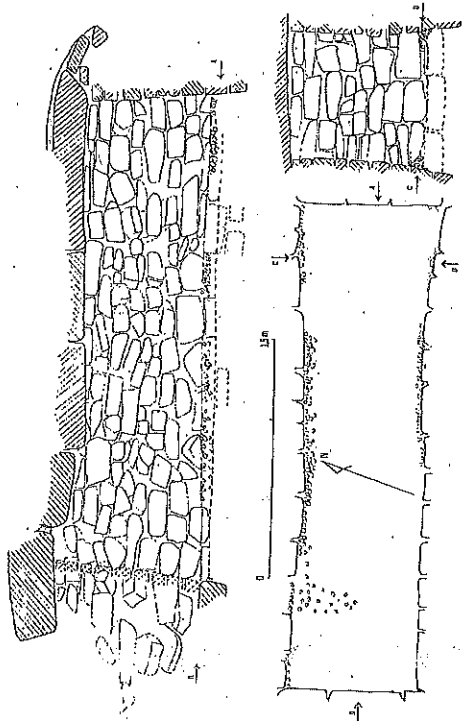
第15図 仙人家墳丘断面

丘が削られているので明らかでないが、北側は墳丘が完全なにかかわらず、埴輪列は10本で切れている。その他の部分も、トレンチで確かめた範囲では、埴輪は確認出来ぬが、かなりの間隔で立てられていたかも知れないが、現地での観察では、他の部分に、埴輪は無かったと思われる。

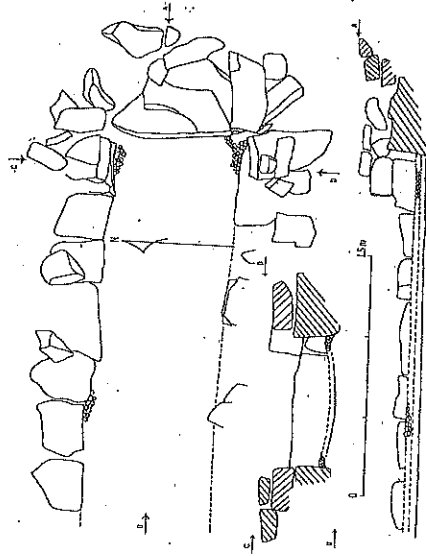
方形部の埴輪列は、恐らく南側にもあったらしく、附近からかなりの破片が出土した。古墳が削られた時、この部分も多少削られたものらしい。象形埴輪(蓋)は、方形部のつけ根あたりに主に散在したが、正確な位置は不明、なお後円部埴輪列は墓石の最下端に接して立てられていた。その外、方形部上から埴輪片に混じて須恵器(蓋・器台・杯等)の破片が出土している。また、方形部にだけ、埴輪基部よりやや低い面に厚さ10cm弱の灰の層が広がっていた。(第15図)。

(内部構造) 主体は二つあり両者共竪穴式石室である。

一つの石室は長軸に平行で、墳丘中央にあり、環表土より天井石上面までが2mと云う深い処



第16図 仙人家中央石室



第17図 仙人家上部石室

に位置する。以後、これを中央石室と呼ぶ。他方の石室は、中央石室と約25度の角度で、方形部方向で開いて、北側にある第14・15図、中央石室の天井石より、1.5mの上部に床面を有する。この石室は破壊が激しい。これを上部石室と呼ぶ。

中央石室は長約3m・巾奥で0.9m・西で0.8m・高さ約0.8m。壁はかなり偏平な栗石積み。天井石は五枚で厚さ0.2~0.3m。その上を厚さ5cm前後の粘土で覆っている。西側壁は盗掘の為取り去られている。床面は盗掘の際かなり掘り下

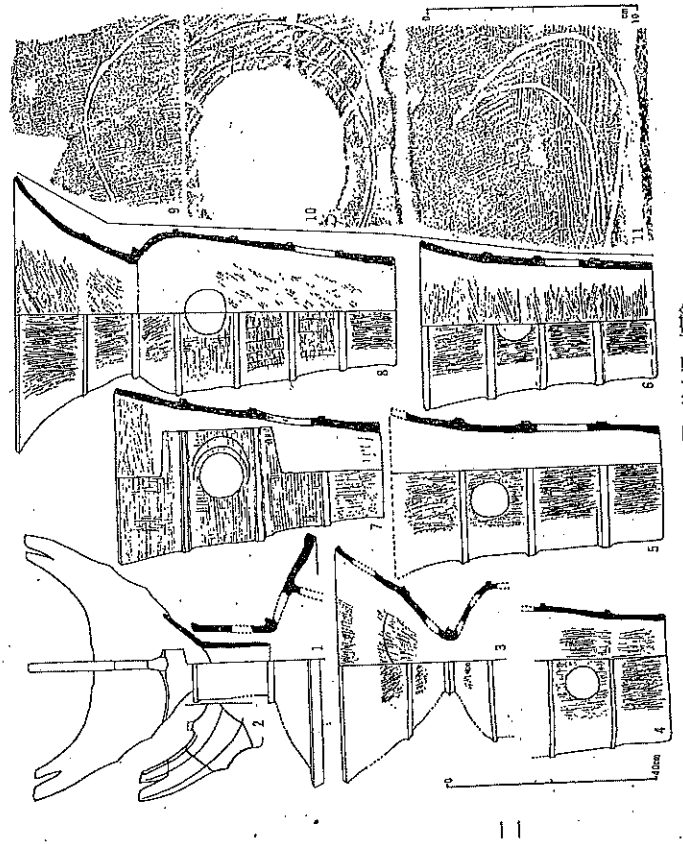
げられ、特に東端は壁石の最下部より深い処まで攪乱されていた。しかし壁に接して僅かに小円礫が残る状態から、床は小円礫敷であったと思われる。床面は現状で僅かにU字形をしているが、本来の状態か否かは不明。なお壁の石は、小円礫面より約20cm下部まで存在する。粘土の有無は

明かでなく、恐らく使用してなかったであろう。

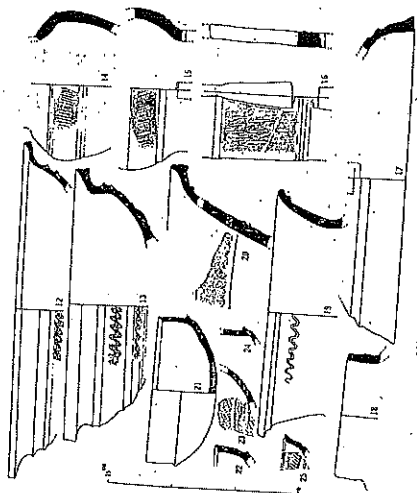
上部石室は現存長2.3mで一端は破壊されている。巾は0.8m・高さ0.4mで、これより上部も破壊。壁石は下部石室と同様の栗石だが、多少粗雑に思われる。床にはこれも小田原が敷かれたらしいがかなり薄い。床面は中央が窪んでいるが、盗掘によるものか、本来U字底だったか不明。なお、この石室は残存部が地表直下にあり、もしこの石室が完存していたら、少くとも現地表面より0.5m以上は飛び出すことになる。かつての墳丘は、1m近く現在より高くなければならない。この古墳は、中央主体を葬つて後、第二の主体を既にある古墳の上に中央をさけながらも重ねて作り上げた珍しい構造と云える。

(遺物) 完全な盗掘のため、遺物としては、はにわと、方形部より出土した須恵器片のみである。はにわは田筒はにわと蓋で、田筒には朝顔形も含む。

後円部をめぐる埴輪は、田筒が主で、基部径25cm前後、土質が軟かく、全体に赤色で、おもに細い刷毛で縦に整形されている(第18図4・5)。同質で朝顔形のものもあり、蓋もこれ等と同質である。蓋は、田筒



第18図 仙人塚・埴輪



第19図 仙人塚・須恵器

は笠輪を組み合す形で、筒が無文のもの、二〜三の条線が認められるもの、二種あり(第14図1・2)共に退化した形であると思われる。方形部の埴輪も田筒が主で、基部

は笠輪を組み合す形で、筒が無文のもの、二〜三の条線が認められるもの、二種あり(第14図1・2)共に退化した形であると思われる。方形部の埴輪も田筒が主で、基部

がなく、各所に散在した。硬質のものには朝顔形もあり(第14図8)軟質のもの(第14図3)より口縁部の開きが少し異っている。しかし共に口縁内面にへらぎの不定形な線がある。又これ等の中の田筒にも口縁近くの外面にも不定形の刻線があるものもある(第14図9・11)。これ等、質の異なる埴輪があるのは、追加、又は立て直しが行われたものであろう。上部石室を造つた時の追加か、祭の時の追加であろうか。

須恵器は小片ばかりだが、坏・産・器台で、すべてこのあたりでは最も古式の須恵器に属し、そのほとんどは六世紀に下るものではない。方形部の灰の面と考え合せ、祭に使用されたものであろう。

なお、古く、中央石室から黄金の甲冑が出て、外国へ売られたと、土地の人は伝えている。「考古界一」(沼田頼麿)には、備中小田郡新山村古墳発見の甲として、黄金の甲でなく、三角板鉄冑の短甲と、頸甲を報告してある。「日本上代の甲冑」(采永雅雄)地名表も、これが引用され、メトロポリタン博物館蔵と記されている。笠岡市小見山熊夫氏が、米國大使館を介して調べたところ、考古界所収の短甲は一九一四年よりまさしく同館に所蔵されてい

る。この古墳出土であつて、当然のものであらう。

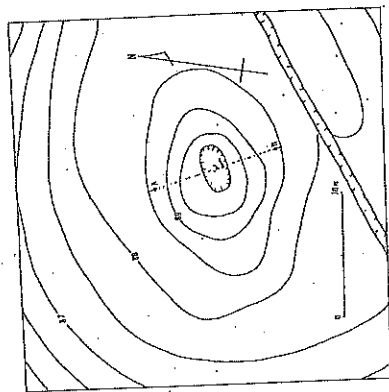
直接古墳には関係ないが、墳丘の北側裾附近から、やや大きな石と、方形断面を持つ鉄釘と、土鍋が一個体分出土した。平安末〜鎌倉初と思われる土葬墓がここに造られたのであらう。

方形部出土の須恵器、或は、埴輪などの遺物から見て、仙人塚も、五世紀末葉の年代が考えられる。しかも構造なり、立地なりから見て、東塚に先行する要素をもつものと思われるのである。

(3) 一つ塚 (第20・21図)

(墳丘) 仙人塚の尾根続き西約40mの地点に、径約10mの小円墳があり、これを一つ塚と呼んでいる。中央に竪堀による凹部があり、外形もかなり不整形になつてゐた。墓石、埴輪は共に認められない。墳丘断面から、褐色の封土中に、レンズ状の灰色土がほぼ平らにつまつた状態が知られる。

(内部構造) 破壊が激しく、地山を20cm位掘り込んで板状の自然石を立てたものが、僅かに残っている。ほぼ東西に長軸をむけた箱式棺の残欠であらう。他に埴輪は何も認め



第20図 一つ塚の地形



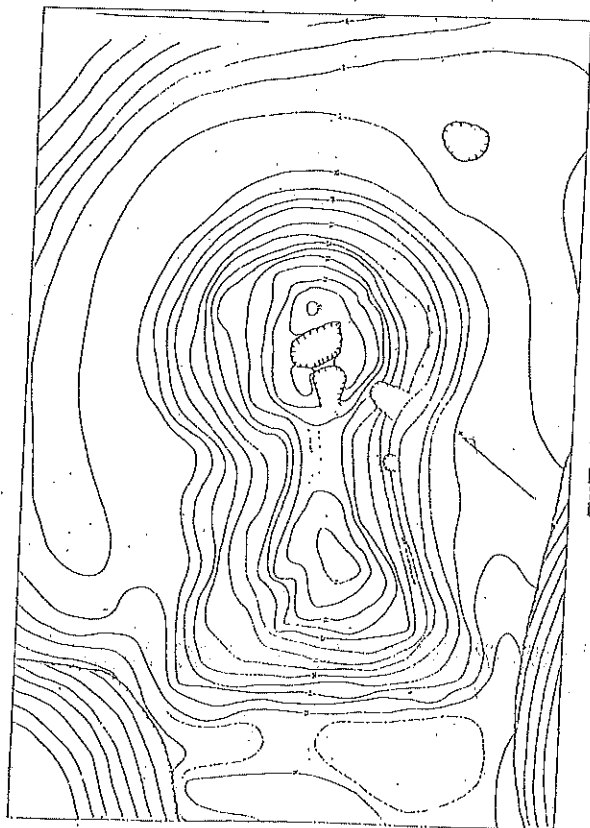
第21図 一つ塚墳丘断面

められない。遺物は全く不明。

(4) 双つ塚 (図版六の(1)(2)、第22・24図)

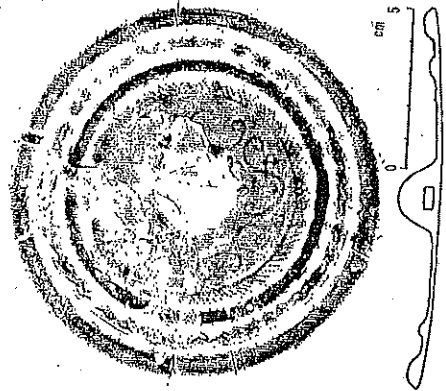
(墳形と埴輪の配列) この古墳群最大の前方後円墳双つ塚は一つ塚の西南方250mのところにあつて、ほぼ西南に前方部をむける。全長約62m、後円部径約40m、前方部巾35mをはかる。比高では前方部頂が後円部頂より約1m低い。地形が前方部に傾いているため、前方部、後円部共に高約6mを示す。墳丘の周囲を巾5〜10mの浅い空濠が、

三



第22図 双つ塚の地形

りまき、
空濠の外
には空濠
底よりも
約50cm高
い外堤状
のものが
巾5mくら
いにと
りまき。
埴輪はく



第23図 双つ塚・横

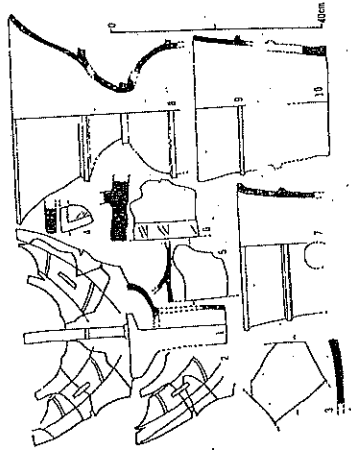
がれ部両側で、ややふくらんだ形をとり、特に北西側ではかなり明瞭である。これが本来の造り出し的なものなのか、後の変形によるものかは明らかでない。墳丘基部から2m強あがつたあたりには、前方部前面以外でやや平坦な部分が認められ、二段築成であつたことが知られる。

この段に円筒埴輪列がめぐること、墳丘の東南斜面で確認した。円筒列のあたりには若干の不定形割石が見られる。埴輪を安定させる意味でおかれたのであらうか。墳丘基部にも、この種の石が認められ、埴輪小片も散在する

四

が、墳丘基部を埴輪がめぐったとする証拠は充分でない。埴輪頂部には前万くびれ部から前方部にかけて、埴輪列が平行して二列確認された。

(内部主体) 後部部頂には大きな盗掘溝がある。これを清掃したが、わずかに散乱した不定形剝石が認められたほか、元来の遺構はたしかめ得なかつた。その盗掘溝を清掃中、攪乱土中から鏡一面が採集された。本来の主体の副葬品であったかと思われるが、ほかには鉄鏝一つ発見出来なかつたのである。



第24図 双つ塚・埴輪

前方部中央に長軸と平行したトレンチを入れた。埴輪表から1.5mの深さまでには、主体部は発見されず、赤土と灰色土を交互に積んだ状態が認められただけである。

(出土遺物) 鏡

後部部盗掘溝中にあつた鏡は、巾やまい平縁の内側に隆起帯をはさんで複線波文と斜行櫛歯文をめぐらし、内区には、唐草文化した十字状竜文をほどこした径11.8cmの青銅色の品である。

埴輪、埴輪は全て白味の強いやわらかい焼質である。円筒の基部は推定復原径2.5cm、断片となり全形は知り得ないが、普通の円筒は埴輪のほか朝顔形埴輪や上端にもたが状の突起のある円筒などを含む。

形象埴輪として、後部部南斜面発見の無文唐形埴輪片(5)、後部部よりの前方部頂出土の唐形埴輪かと思われるもの(4)、不明形象埴輪片(3)・(6)がある。くびれ部頂上と中段埴輪列中には、たしかに蓋も含まれ、髷飾りの部分が知られる。断片ながら復原形が想像されるもので、細い筒形部の上を皿状につくり、その上に四枚の樽を接合させる式である。髷中央には長方形の透し孔を有し、髷の画面にあるやや退化した刻線の裝飾文様は単線と複線でえがかれている。笠部の破片はわずかな小片で、原形を知り得ない。双つ塚の埴輪は、盛期の前方後円墳の形を示し、形象埴輪の状態は退化しているが、仙人塚のものよりも古い要素を示す。五世紀後葉をさかのぼるかどうかは明言できないとしても、

この古墳群中では最も古いものであらう。

(5) 七つ塚

(図版六の(5)~同七・第25~28図)

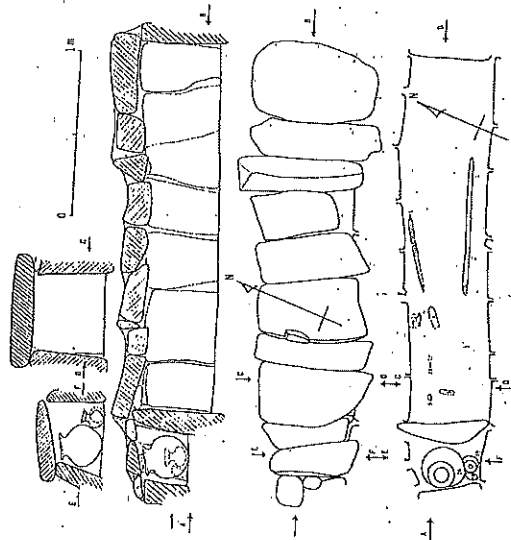
(墳丘) 双つ塚西方の扇根上に、周辺を開墾され、現在僅かに痕跡を留めるものも入れて三基の小田墳が並んでいる。これを七つ塚と呼んでおり、かつてはかなりの数存在したらしい。調査したものは、この中で西端に当り、双つ塚より約150m西方、径10m弱、高さ1mのものである。埴輪、墓石は認められない。残存する他の二基も、ほぼ同じ規模であったと思われる。

(内部構造) 墳丘の中央地帯下約0.4mの処

に天井石があり、長辺をほぼ東西に向けた組合式石棺が存在する。東西の壁石は各一枚、南北の壁は各七枚の長方形板状の石を並べて立てており、天井石は、八枚で、かなり小形の石を用いている。天井石の間には粘土で目盛りがされていた。この棺は一見整った形ではあるが、小さい長方形の石を壁に用いた為、盗掘の痕跡は無いが、北側壁では一部の石が中に倒れかけたり、石の継ぎ目から土砂の流入



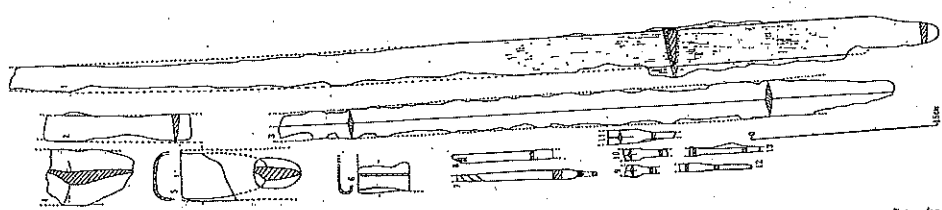
第25図 七つ塚墳丘断面



第26図 七つ塚飾式石棺

も多く、棺内の保存はあまりよくない。棺の内容は、長2.2m巾約0.5mであるが、西側がやや狭い。高さは0.45m前後。床面は平面と思われる。

なお、この棺は西側に副室を持っていた。棺の西壁に接して造り付けられたもので、北側は小さい石二枚、西・南は各一枚の石で囲まれた小室である。蓋は小形の石二枚を



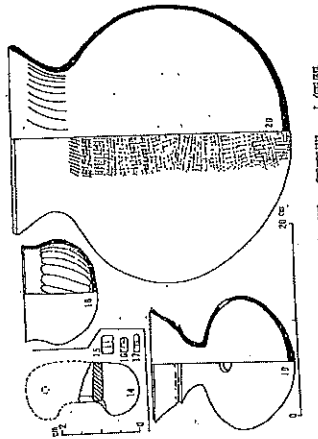
第27図 七つ塚・鉄器

用い、すき間を小さい石で嵌っている。主室と同じく竈には粘土の目張りがある。内容は、巾40~45cm、長さ30cm、高さ30~35cmで、底の面が石棺より15cm高い。その為、天井石は、主室も副室もほぼ同一面にあり、最初棺の天井石の面が現れた時、長大に見えたのは、主、副室の区別が見られなかった為である。これ等の石棺は、東西で棺に接した掘り込み、南北では南が多少広い掘り込みの中に造られ、なお棺内壁のみにべんがらが塗られていた。

(遺物) 主室の遺物は、棺の北側壁の中央に接して切先を西に向けて剣が一本、ほぼ対称の南側に同じく切先を西に向けて刀が一本、剣の西に鉄鏃等の束と鉄斧一、その西に滑石の勾玉、白玉三が散在した。また西壁近く、鉄先に石の勾玉、白玉三が認められた。全体に鉄の保存が大変悪く、以上は僅かに原形が窺えただけのもので、土中に鉄鏃が拵った部分が西壁近くや、鉄鏃の周辺に多かったの

で、他にまた何等かの鉄器が副葬されていたかも知れない。なお東半には遺物が発見されなかつた。遺骸の痕きは見られないが、状況から見て東に頭を向けていたと思われる。

鉄刀は現存長さ74cm、巾約3cmの断片と(第27図)長さ12cmの断片(同・2)がある。両者は直接、接合しないが、出土点などから同一個体と思われる。(1)にはさやの木質がかなり長く残っていた。剣は現存長さ50cm、巾3cmで切先を欠く。若二個は共に保存が悪く、刃部の一部と袋の一部が残っているだけである。棺の南端近くで出土した鉄片(6)は鉄先である。鉄はかなり数が多いが、存在したらしく鉄



第28図 七つ塚・玉・須恵器・土師器

一七

鏃がたまっていたが、保存が大変悪く、僅かに断片が取り出せたものは数本であった。しかし少くとも二十本くらいは存在したであろう。種類は二種あり、両方共原形を残すものはないが、共に頭部の小さい尖根である。一方は片峰で長い櫛状部を有し数本あり、(第27図9、10、12、13)他方は両峰でやや峰が広く(同・11)確認されたものは一本であった。第27図6の鉄片は残存部4x2cmの板状で一端が曲げてある。他のものと同様保存が悪く鉄先であろうか。第27図7は、長い櫛状のもので一端は木質に差し込まれ、他端の近くで握りがあり先はない。鏃であろうか。同・8はかなりうすい櫛状のもので不明品。

副室には、須恵器壺と、竈の南側に須恵器甗、土師器碗と夫々一つが入っていた。須恵器壺は口径20cm、胴径30cmで胴部はほぼ球形。外面は格子の叩目、内面は無文だが叩目を後で横すりして消した様子。甗は口径12cm、胴径14cm、頭の短い胴の大きいものである。土師器碗は口径10cm、高さ8cmで僅かに頭がくびれている。口縁端はなでて整形し、内面は指で縦に整形されている。これ等の三点でほぼ副室は一ぱいになり、他に消失する様なもので、大きなかまのものは入ってなかつたと思われる。夫々に土が入って

いたが、内部には特に何も認められなかつた。これ等三点は酒器一式であろうか。壺には酒でも入っていたかも知れない。

以上遺物からみて、この古墳は6世紀に下るとは思われず、周辺の同規模の古墳も、ほぼ同様なものだったのである。

三、結 語

以上のように長福寺裏山古墳群は三基の前方後円墳と教基の小円墳からなっている。総社の平野に直結する吉備郡真備町を除いた備中西部小田川流域で、この様な丘陵上に営なまれた中期的な様相の古墳が教基連なるところは、井原市木之子町笹井、山手古墳群、同東江原町、内狭古墳群、同大江、石塔山・川端山古墳群などがある。長福寺裏山古墳群はこれらのうちでは最大の規模を有し、大形の三基はこの地方として数少ない空疎をそなえたものである。長福寺裏山の各古墳の年代がいつれも五世紀後半的な様相を示し、一応は双つ塚―仙人塚―東塚の順序を想定すると

一八

しても三者はせいぜい半世紀くらいのおちにある。又小田墳のうち、遺物の知られた七つ塚も同様な年代を示すのである。五世紀中頃までは驚異的な規模を示していた吉備の古墳が小形化する時期に至って、備中西部では最大に属する古墳が出現したことになる。しかもこの長福寺裏山古墳群をめぐり旧小田郡北川村、新山村、吉田村（全て現笠岡市）のあたりは、これに先行するある程度の規模を持った古墳は今のところ見当らない。わづかに時期不明の小円墳や古式の須恵器を出土した埴式石棺が知られる程度である。とすると、この時期になつてかなり急速にこれだけの規模の古墳がこの地に出現したことになるのである。

五世紀後半期はたとえば雄略紀の物語（前津屋事件、田狭の乱、皇川皇子の乱）にも見られる様に、吉備の中心的豪族の勢力が後退する時期にあつており、巨大な古墳の築造は影をひそめ、その反面中小古墳の数が増加して来るのが知られている。このことは大和と顔顔した勢力をもち吉備の地に君臨した中心的な豪族がその力を減じ、新たに中央大和勢力に追従した性格をもった中小豪族が出現したことを想像させるのである。この様な状態を考えるとそれまで大きな古墳を作り得なかつた笠岡市北部で、長福寺裏

山古墳群が五世紀後半の時期に備中西部で最大の規模をもつて、かなり急速に現れたことも、中心的豪族とは別にたとえ同じ氏族中でも分化が進み今まで表面に現れなかつた次の層が大和勢力との關係で巧みに転身して新しい支配階勢の中に入つて来た姿と見る事が出来るのではなからうか。この様な事情は各種の古墳が密集している地域でも、恐らく同様であらうが、判別し難く、長福寺裏山などで顕著に見られたのであらう。

附 関戸 廢 寺 址

録 木 義 昌

問 壁 忠 彦

問 壁 霞 子

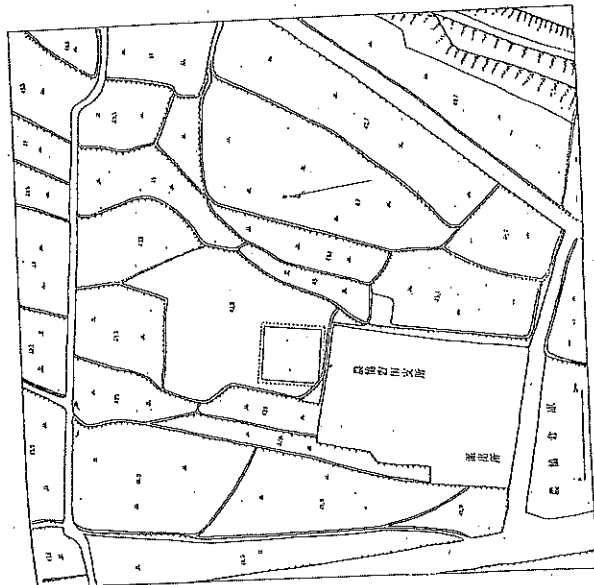
この遺跡附近からは瓦片の出土が頻々とし、以前から高田馬治氏などにより指摘されていた。私達は石田茂作氏からの注意により、笠岡市教育委員会の希望に従い、昭和三十七年二月一日より六日間にわたり録木義昌担当のもとに試掘を行なった。

関戸廢寺址は関戸八幡神社から西に段々とはなつて水田中にあり、今回の調査で発見された塔中心礎石とそれきとりまく塔基壇の石積が今日までに知られた唯一の遺構である。ただ塔基壇の北方44mのところは、基壇とはほぼ平行して東西に走る農道がある。この農道は塔の一切と平行していることなどから、寺域の構造の一部を残しているのではないかと思われるものである。この農道の中央よりもやや西よりに塔は位置しているが、この状態だけでそれ以上に関戸廢寺の構造を類推するのは危険であらう。なお、

前記農道の北側にも瓦が相当量出土する地点がある様子だが、正確な位置は確め得ず、すぐに伽藍配置と結びつけて考えることも出来ない。

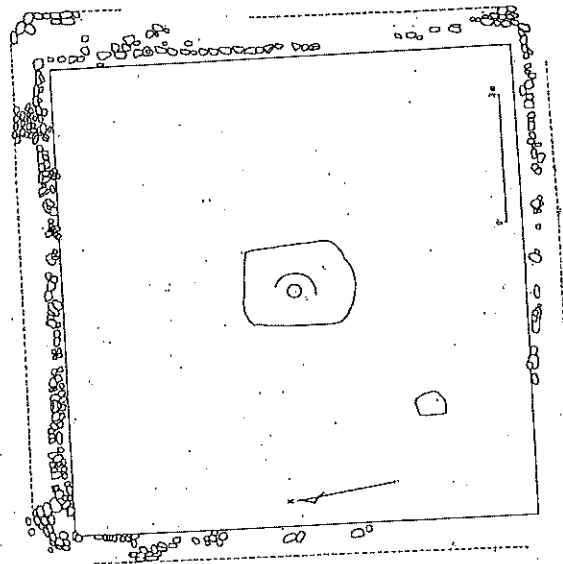
塔址は、塔中心礎石が原位置に残っており、南西角の一礎石も、ほぼ原位置に近いところで発見された。地表下約40cmに埋まっていた心礎は、厚さ60cm、南北260cm、東西180cmの花崗岩質で、中央に径30cm、深さ13cmの掘り込みがある。なお、この心礎上面は東方が10cmばかり高くなつているためか、東半を半径50cmの半円形にわづか掘りくぼめて、心柱をすえる場所を平坦にしている。このために心柱の径が約1mであつたことが知られるのである。心礎上面には、東半に半径60cmの半円形、西半は中心から40cmのあたりまで、木炭が10cmと2cmの厚さに密着していた。おそらく火事によって滅失した心柱の痕跡であらう。心礎の西側に接して、焼けた瓦がつめとまれた1.5m×0.9mばかりの穴があり、深さは礎石の下面に達していた。何時の時期に何のために掘られたかは不明ながら、一處附記する。西南角の礎石は60cm×70cm、厚さ50cmの花崗岩で、上面がやや傾いている。多少は移動しているためであらう。しかし、基壇や心礎の位置から見て、大きく原位置を移動している

とは思われず、現在、心礎面とほぼ同一面上にある。基壇はこのあたりの水田の地山とほぼ同じ土をかためた感じのもので、心礎をめぐって、一辺約11mの方礎をなし、栗石風の不定形な石で四周を積んでいる。栗石の上面は礎石面とほぼ同一の高さで、栗石は数個傾斜させた形に積み重ね



第29図 関戸磨神社附近地形図

て、40cmくらい下方まで及ぶ。この石積は、東面と北面では傾斜がゆるく、80~90cm巾に、西面ではやや急で40~50cm巾になっている。そのため、基壇石積の上面は一辺約11mで、心礎を中心とした位置にあるが、石積の下面をみると、東方と北方に少しずれた形で、一辺約12.5mとなる。心



第30図 塔址平面図

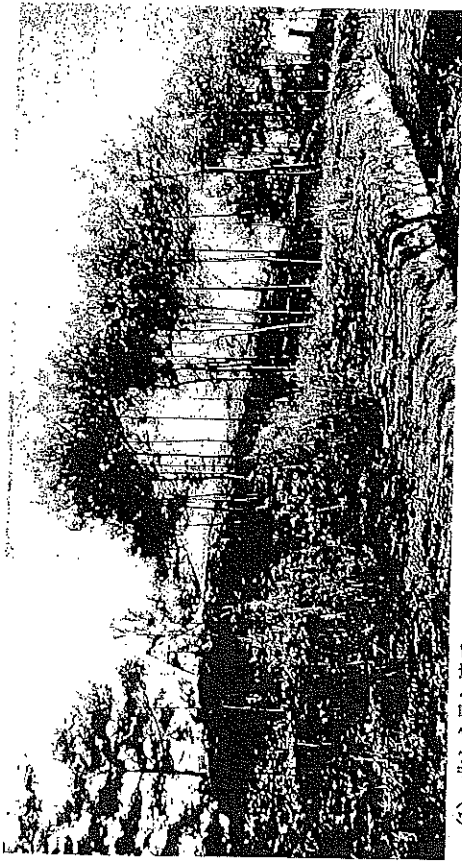
礎以外に原位置の礎石がないため、正確な塔の一辺の長さは判らないが、心礎の大きさ、西南隅のやや移動したかと思われる礎石などから考えて、少くとも6m以上になることは考えられる。

塔基壇の外まわりで発見される瓦はかなりの量にのぼる。そのうち、軒丸瓦、軒平瓦はそれぞれ三種ある。軒丸瓦は縁の高い単弁の式が最も多く、つづいて高い縁のうちに裾歯文をめぐらせ、このうちに複弁を持つもの、最も数少ないのが縁の低い単複弁のものである。複弁のものは最も焼成が良く、単複弁のものは焼も悪く、つくりも粗雑である。軒平瓦は唐草文三種が知られる。そのうち最も多いのは縁の内に二重線をめぐらし、その中に左右対称の唐草文を配した楯中や美作国分寺瓦に似たものである。出土した数量の上からすれば、これが単弁の軒丸瓦と組合されるのであろう。次に多いのは縁が低く一重線をめぐらした内に、左右対称になった唐草文があり、この唐草文は、縁が太く大きい。他に僅か二・三点これと趣きの似た唐草文がある。これら軒平瓦の少例のものは軒丸瓦との組合せが明らかでない。このほか、瓦の層にはさまれて、鉄釘若干と銅製の相輪の一部と思われる小断片が出土している。

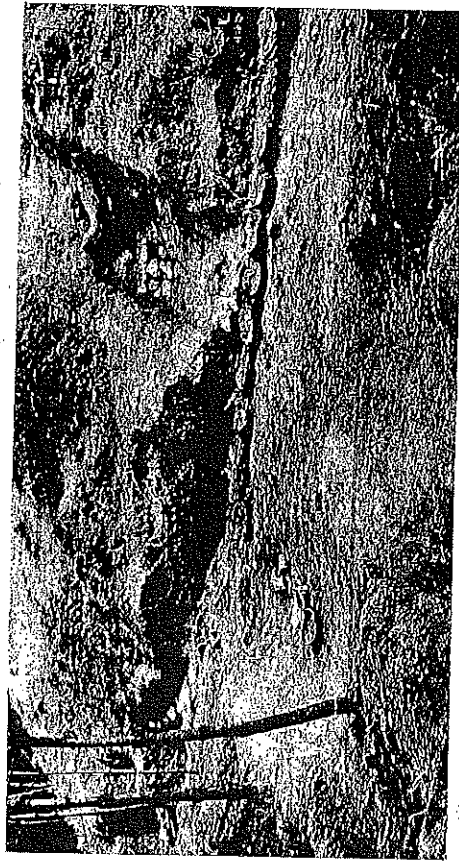
既に以前から、この寺址で発見されていた相当量の瓦は、塔址附近で今回発見された瓦と同様な式のもので、その比率も塔址発見のものとはほぼ同じである。ただ既存の瓦の中の最も数多い唐草文軒平瓦に僅か相異なるものがあり、軒丸瓦にも、他に二種の異式が認められる。が共に出土例は非常に少い。このほか既存の遺物として嚙尾の断片が地元に保存されている。これは、縦帯を二本の条線で画き、その内に円形文を画く。縦帯の外にだけ放射状の条線をえがいたものである。

こうした瓦から見ると、特に軒平瓦の中で最も量の多いものが備中・美作国分寺に近似し、他の瓦もこれとあまり時期を異にすることは考えられないから、本等の創建は、このあたりの国分寺建立とさほど変らない時期かと思われる。これは、吉備地方の平地寺院址の大部分が、瓦等から見ても、殆どこの時期に属すると思われる点とも一致し、天平期に全国的にさかんだったと考えられる寺院建立の風の一つとも云えよう。ただこの関戸磨寺がこの地で、どのような人々に、どのような形で建立され、支えられたかは明らかでない、が恐らく、かなり古くからの系譜を引き、このあたりに勢力を持った家族の存在が考えられるのである。

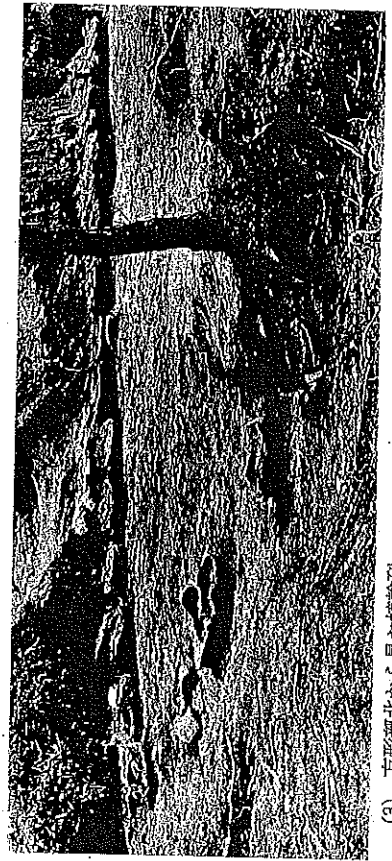
图版第四 仙人塚墳丘埴輪列



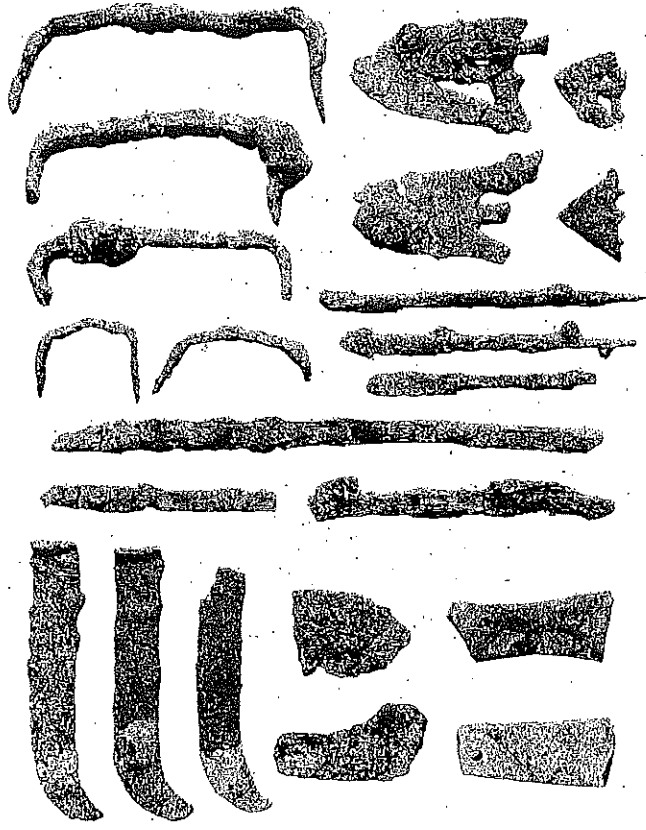
(1) 北から見た墳丘



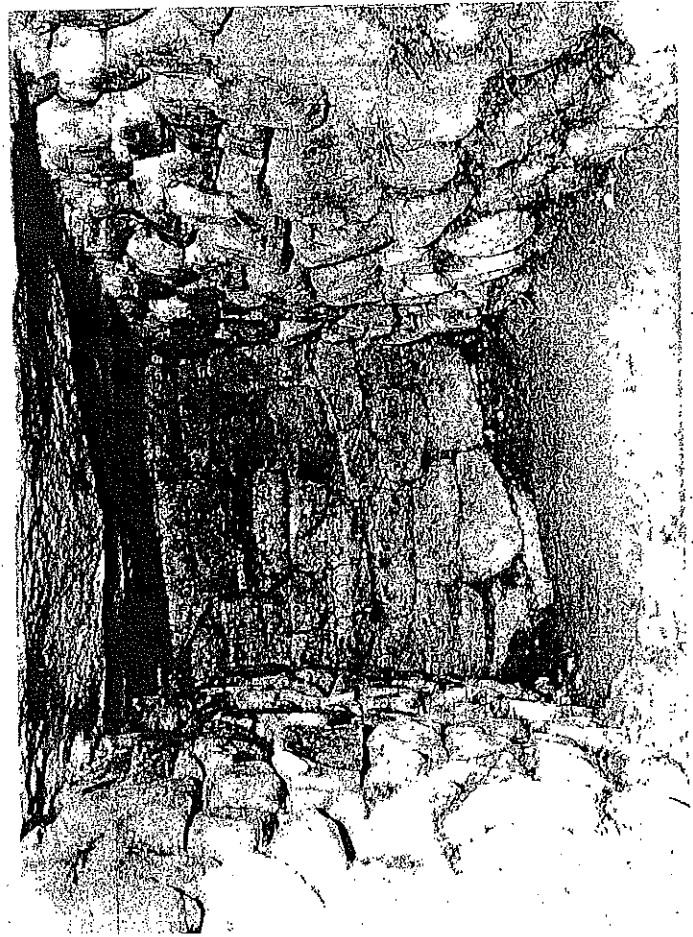
(2) 方形部から見た埴輪列・葺石



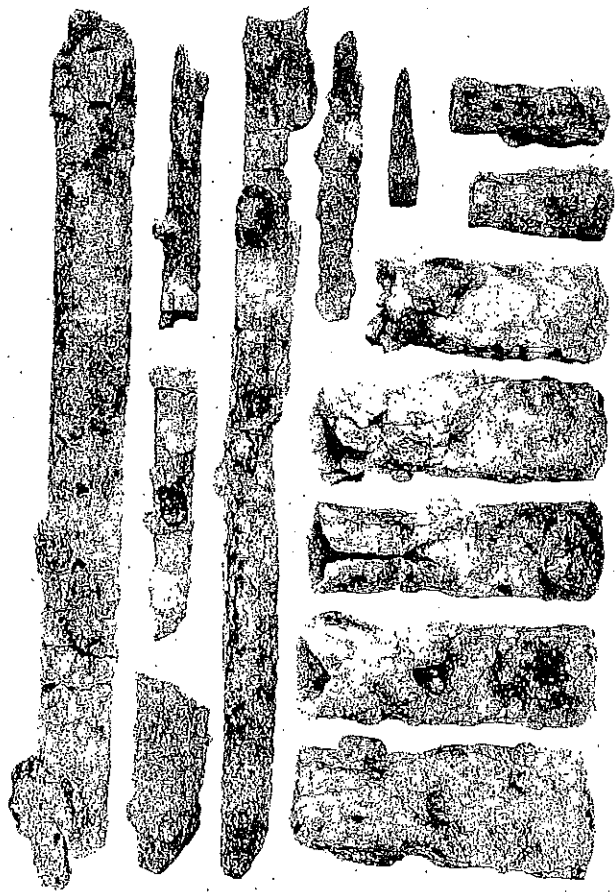
(3) 方形部北から見た埴輪列



(1) 東冢 鍔・鏃・石・鉞・鏡・鏡



(2) 仙人塚中央石室内部



(1) 刀・斧



(2) 斧・馬具

東家
仙人塚↓
一ツ塚↓

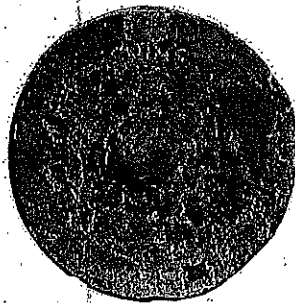
又ツ塚↓
七ツ塚↓



(1) 南から石垣群を望む

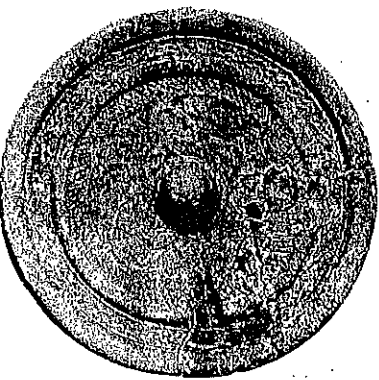


(2) 東家前方部石室

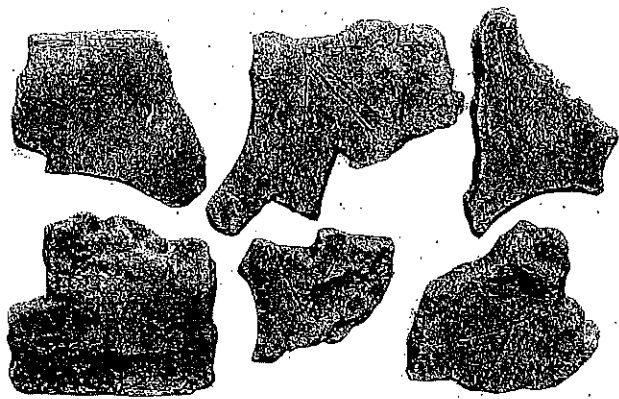


(3) 東家 鍬・玉

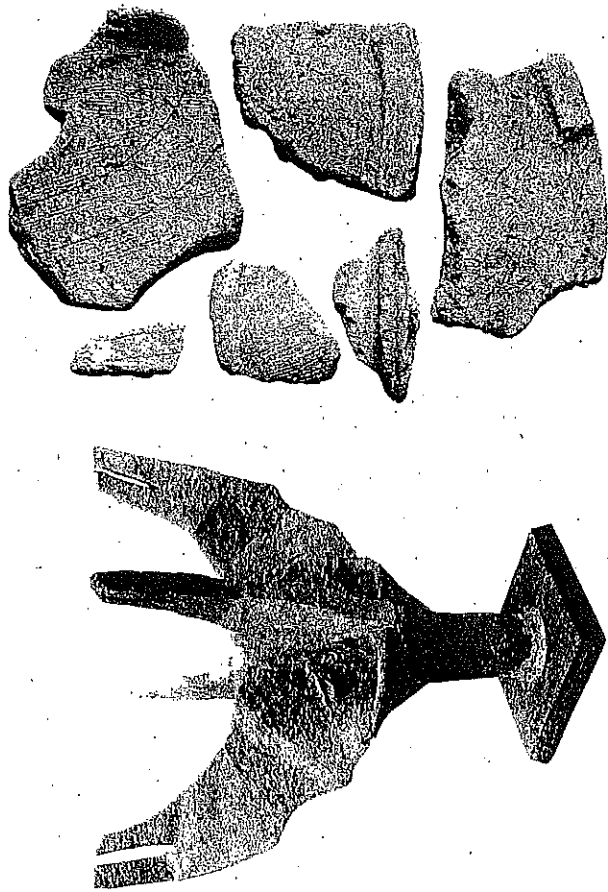
五五五五 古墳新築地・東家前方部石室・同遺物



(1) 双つ塚鏡



(2) 双つ塚形家墳輪

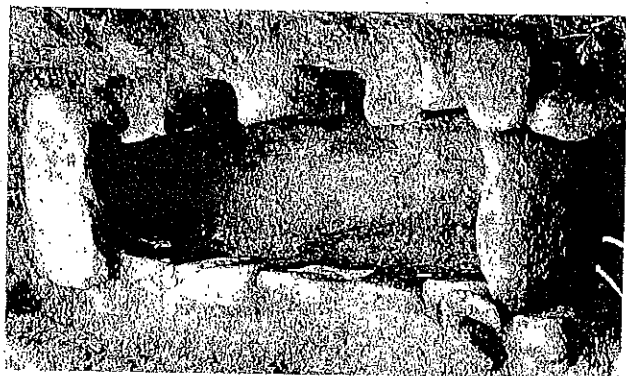


(1) 蓋の輪

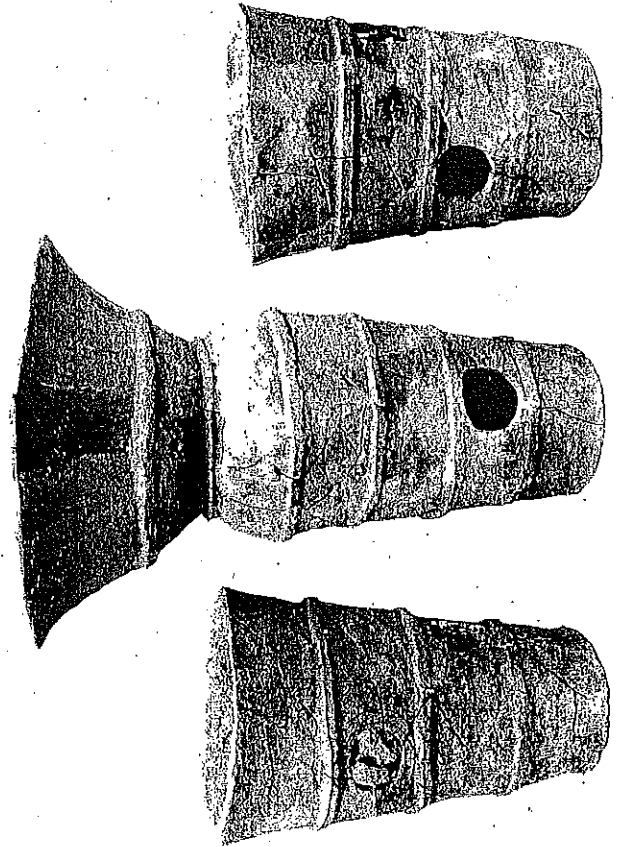
(2) 蓋



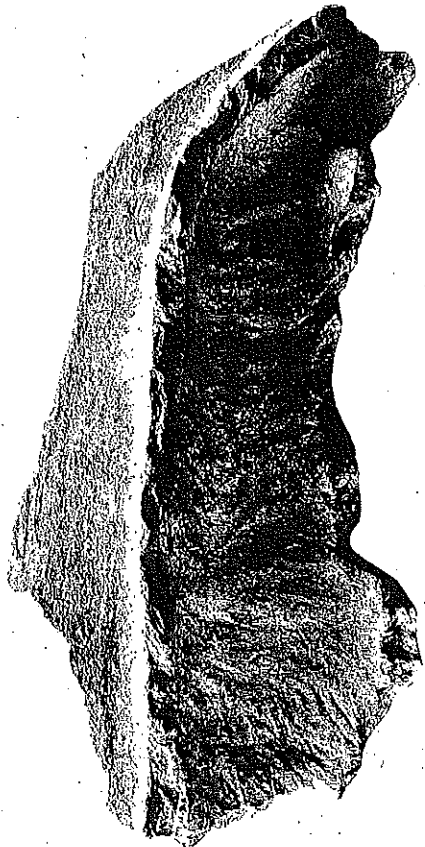
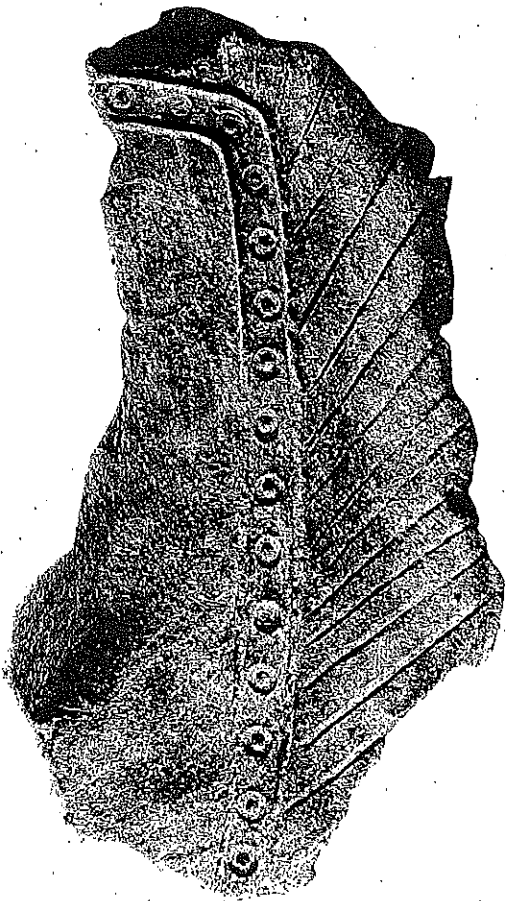
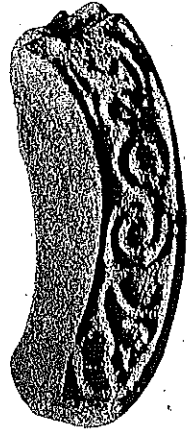
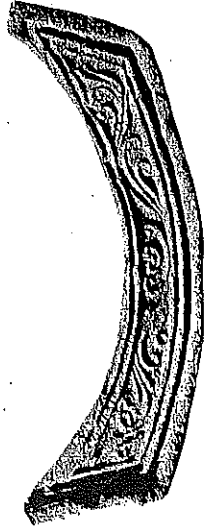
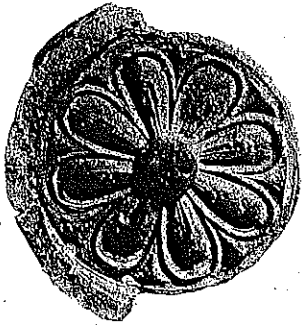
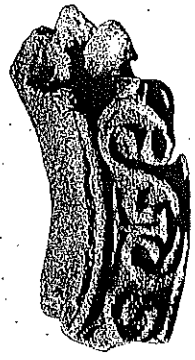
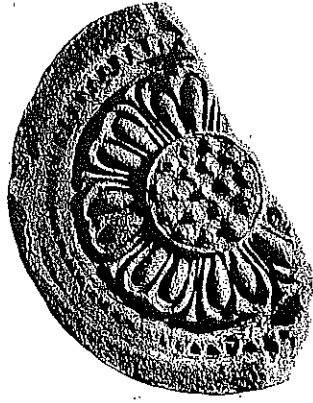
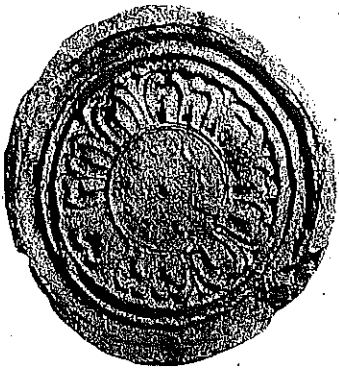
(3) 七つ塚石棺上面



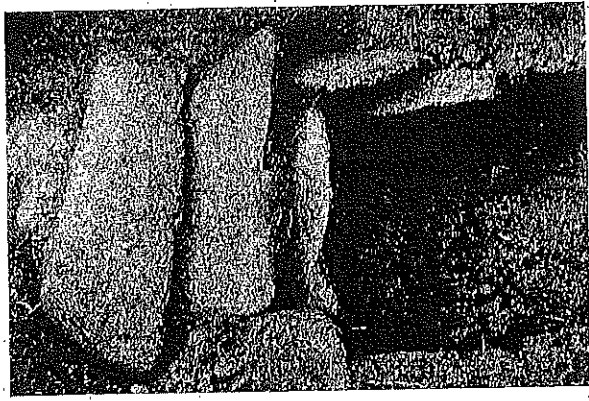
(4) 七つ塚石棺内部



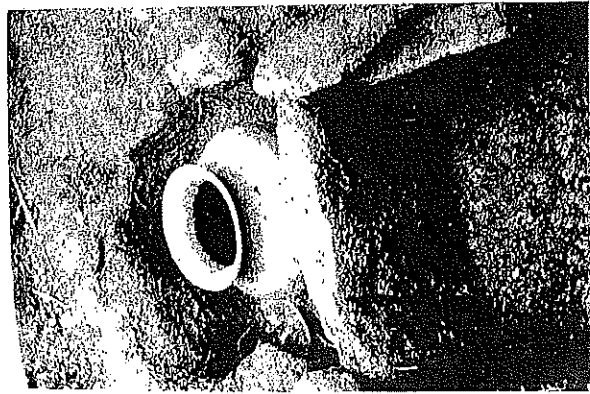
(3) 円筒埴輪・朝顔形埴輪



图版一〇 野戸院寺址出土の踏尾



(1) 副室上面

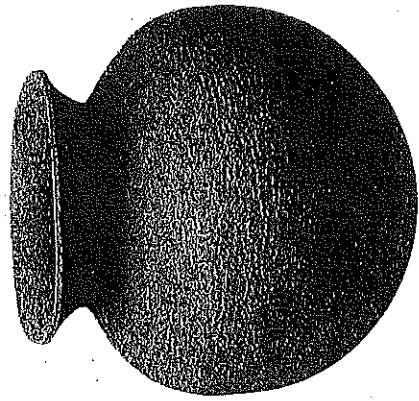


(2) 副室内部

図版七 七ヶ峯古墳副室・遺物

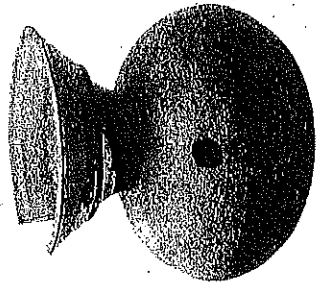
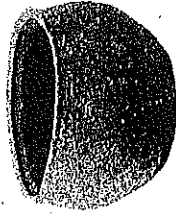


(3) 玉

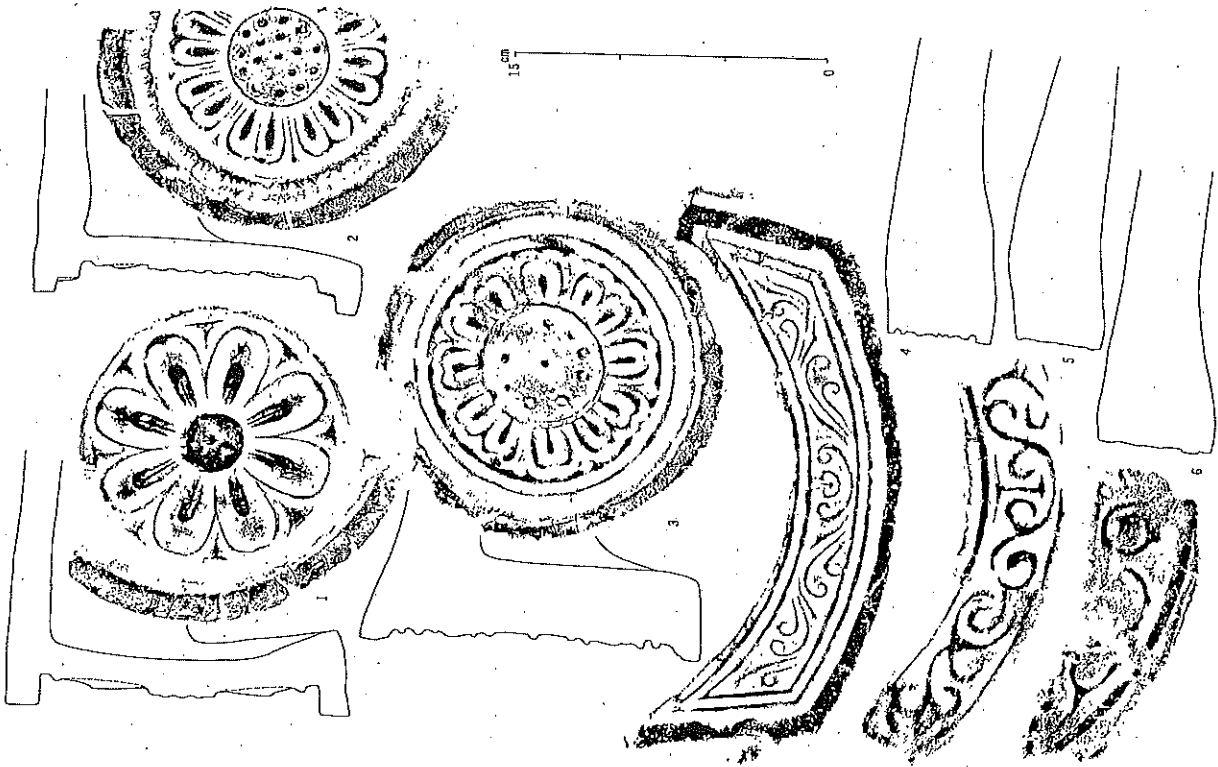


(5) 須恵器壺

(4) 土師器碗



(6) 須恵器罎



図版八 関戸塚古墳址出土の斬瓦拓影